

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々職員は笑顔で接し、利用者の希望や思いがかなえられるようなケアやご家族と利用者が共に満足できるように心がけている。	12年前の事業所開設時より職員間で共有してきた介護理念「笑顔、満足、まごころ」を日頃の介護の中で利用者支援に活かして来た。どの職員も笑顔で利用者対応を心掛ける姿勢が、職場の雰囲気からも感じられる。理念はトイレ内や事務所、廊下等、立ち止まった時職員、ご家族、地域の方の目に付く場所に掲示し、職員間で共有を図りながら実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	推進会議や地域の神輿が今年から開催され、コロナウイルスの影響後、やっと徐々に地域とのつながりがまた少しずつ持てるようになってきたことがよかった。	地域交流については今のところコロナ以前には戻ってはいないが、ご家族が野菜や「地域の百合の花」を届けて下さるなど以前に戻りつつある。今年の防災訓練時ベルを鳴らすことの周知をチラシ配布にて行った。面会も含め、少しずつ出来ることから地域との繋がりを取り戻すよう努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に向けて事業所からの発信はできなかったが地域包括からの昨年、今年とマリーゴールドの植木をいただき、水やりや種取り活動ができた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度から事業所内での開催されるようになったりしたが、その都度地域や周囲のコロナ感染状況に対応しているため書面の際にはご意見用紙を入れ、返信封筒同封して、意見など頂けている。	コロナ禍により会議は書面会議が続いていたが、5月には事業所内で会議開催を行った。参加者は地域代表2名、地域包括支援センター職員を含む市職員2名、家族、入居者1名の参加の中、事業についての理解を得ながら、意見や助言をもらっている。今年は包括支援センターの職員からの紹介で、しおり作りの手伝いが出来たとのことである。会議案内と会議後の報告については、委員の範囲内で郵送し、書面開催時は会議メンバーに返信封筒を同封するなどの方法にて意見を貰っている。	運営推進会議は出席者間の報告や情報交換に終始することのみに留まらず、地域や利用者家族から広く意見や助言を聞く大切な機会と捉え、出された意見からサービスの向上を図ることが求められる。地域密着事業所としての役割を確認しながら、会議に参加されなかった家族への会議案内と会議後の報告を行い、共に利用者本人を支える協力者として、事業所の課題解決に向けての努力が期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市役所介護保険係の担当者には質問事項等、すぐに対応してもらっている。	運営推進会議の参加者として包括支援センターの職員を含む2名の職員より意見や助言をもらい、今年度は介護職員人材補助金の件で声をかけてもらうなど連携が図られている。また利用者の入院に際して、介護報酬請求について相談に向くなど、事業所の実情を伝えながら協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアについて、指針の周知や身体拘束をしないケアを可能な限り取り組んでいる。3か月に1回の代表者会議で検討したことが他の職員にも周知し、日々のケアに生かせるようにしている。	身体拘束についてはマニュアルや指針に沿って全職員で取り組んでいる。人感センサー使用については17人中、5名の方が使用されている。家族より書面にて承諾を得て、代表者会議にて3ヶ月に1回検討しているが、本来は毎月の会議の場にて職員間で可否について検討を行い、結果を文書に残していくことで取り組み協議していく計画をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に当たるようなこととは何か、折にふれ、確認したり、必要な改善点などは話し合い、可能な限り改善に努めている。	虐待防止については年間の研修計画の中に盛り込み、スピーチロックについてや、チェックリストを使用するなど、虐待事例について学ぶ機会を設けている。不適切ケアが虐待に繋がって来ることから事例等の読み合わせを行い、毎月の会議の場にて全職員で確認している。介護現場のハラスメントについても学びを通して働きやすい職場作りに努めている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社協の自立支援事業を活用してもらい、支援員の訪問を受けたり、利用者はその時を楽しみにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明・理解を図るように努めている。改定時には、説明文書や同意書を得ている。特に看取りについても開始時だけでなく、契約時にも説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族に苦情などがあつた際には直接話してもらったり、内容によっては職員に周知している。意見や要望など、面会や報告連絡時などに伺うこともあり、会議などで報告している。	利用者からは日頃の支援の中で要望などを聴き取るよう努めている。利用者家族より感染症対応時の、面会の方法について要望があり、廊下にてガラス越しから、パーテーションを使用しての面会に変えた。また普段の表情等の写真を残して欲しいと言う要望に対しても、各ユニット分のカメラを購入しタイムリーな写真が残せるよう、出来ることから対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の見解や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月定例の職員会議の後、2つの事業所代表者が集まり、職員の見解や提案を聞いてもらう機会や現状の問題点や工夫を話し合ったりしている。	法人は2事業所を運営、両事業所間にて定期的な異動が行われている。その中、職員からの意見で人員に関する事、勤務時間に関することは法人として取り組み、経営会議の場にて協議している。管理者から職員への声かけや休憩時間等も利用し、意見を積極的に聞き取るなど、働きやすい職場作りに職員と共に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	運営者も毎月会議を兼ね、事業所内の報告を行っている。職員には個々に資格取得に向けて声掛けしたりしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	zoom研修参加や研修会など、勤務体系に沿った参加を確保するよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染防止のため、交流会などの活動は見られなかった。包括支援センターの活動協力としてしおり作りに参加できた。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に家族などから様子や状態を伺い、サービス導入に不安・心配を受け止め、安心につなげられるよう、関係づくりをしている。またいつでも聞ける体制ができるよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の状況や様子を聞いたり、家族等の苦労や不安、要望などを伺ったりして信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	希望、要望、不安や心配なども伺いながら、そのために必要な支援や、できる支援やサービスを提案している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人ができることやれることを探し、発見できたことを職員で共有し、その人を深く知る手立てとしている。得意なこと、生き生きとする場面作りを大切にしている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ぶなの里通信で写真やご本人の様子をお知らせしたり、電話などでの報告や希望、相談などもさせてもらい、本人が必要なものなどをご家族から準備していただくこともある。	事業所の様子を伝えるため「ぶなの里通信」を3ヶ月毎に家族に届けている。受診については事業所の職員が対応することが多く、協力病院利用の方が16名と多くなっている。以前からの主治医を継続している方もおられるが、その場合は家族に協力をお願いしている。受診時に限らず、家族とは日頃より連絡を密に取り合い協力をもらいながら良好な関係を作り努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染防止の中、電話やガラス越しの面会などでつながりを継続している。状況に応じた対応をしている。	コロナ禍以後、出かける機会が少なく受診を兼ねてのドライブ企画等、短時間でも出かける機会を持つよう努めている。以前は行きつけの美容院を利用する方もおられたが、現在は事業所指定の床屋さんを利用してもらっている。家族や知人とは電話での交換や面会、手紙等のやり取りを通して馴染みの関係が途切れないよう支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	その方の性格や思い、状況から、職員が周囲の様子を見ながら支援するよう努めている。特に利用者同士の最近の状態も捉え、食席に配慮したり、席替えなどとしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	移り住む先の関係者には、本人様の情報をできるだけ詳しく伝えたり、その後の様子についても聞かせてもらうこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意向確認ができない方が増えてきているため、関わりを持ち少しの気づきからも汲み取れるようしている。また、意向に沿えるよう努力している。	入所時の訪問面接や本人、家族からの聴き取り、ケアマネジャーから情報提供などで、本人の思いの把握に努めている。また日頃の支援の中で何気なく口にするを書き留め、職員間でも共有に努めてい。暮らしの中の思い出の品、茶碗、コップ、箸などを持参してもらい、また意思確認が難しい利用者についても、望む暮らしに可能な限り近づけるよう支援に努めている。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報から読み取っているが状態変化により、なじみの暮らし方、生活への思いなど聞く手立てが少なくなっているため難しくなっている中でも入浴時や居室訪問したりして職員の話しかけや何気ない会話の中で聞き逃さないようにしている。	支援時の何気ない一言や入浴時は、本音が聞ける場面として、職員は大切な時間と捉えている。これまで暮らしてきたリズムを崩さないよう、生活暦の中から、事業所内で花、植木の水やり、貼り絵など、これまでの生活に少しでも近付けるよう、ご家族に協力を頂きながら支援に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	現場の職員から意見をもらい、その人のできる力を理解し、それを役割としたり、継続的に、また、状態変化に対応するようにしていくため、職員全員で取り組んでいる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネを中心に、本人の思いや家族の意向を聞きながら、状態変化にも見直しやモニタリングを行い、よりよいケアに結び付けられるよう職員全体で行っている。	入居時、利用者や家族から聞き取れる情報とともに、担当していたケアマネジャー、サービス事業所から得たアセスメントから暫定プランを立てている。入居1ヶ月の間、職員でなんでも書ける用紙を用意し、その利用者の会話された言葉や動作など、気づいた事を記入し職員会議で確認、その都度、本人・家族に確認しながら本プラン作成を行い、6ヶ月後ごとの見直しを行いながら支援に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員全体で連絡ノートを活用し、関わった職員が記録に適宜記入し、一人一人の情報を、変化のあった時は見直し、共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状態や家族等の思いに柔軟に、また状況に応じて通院、送迎等対応している。必要な物なども家族ができないときは代行したりしてその都度対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの影響により、地域へ出かけたり、外食などもできないこともあった。それでも施設内でお弁当などを食べていただいたりした。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医のほかの受診など、ご家族と協力している。状態の変化を報告、受診の方向性の希望などその都度対応を相談するようにしている。	かかりつけ医師2名、協力医師1名、訪問看護師は毎週1回午前の訪問があり、協力医師の訪問看護師は24時間体制で受診の支援が行われている。急変時は訪問看護師に連絡し、指示を待って救急車手配となる場合もある。診療科目にない場合は家族や事業所が受診の支援を行うこともあり、相談しながら支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の定期の訪問看護による健康管理、医療面での相談・対応などを行っています。24時間訪問看護と連絡がとり合える体制にあり、体調変化の報告を行い医療につなげてもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院との連絡会議にも出席させてもらい、関係作りに努めている。入院時には病院の地域連携室や担当看護師と折にふれ、情報交換や相談を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時には重度化や看取りについて、事業所指針を用いて、本人、家族等からの意向確認している。状態変化を家族に報告、主治医の指示により受診し、本人に合わせた対応をしている。訪問にも状態報告を行っている。	看取りについては、入所契約時に契約書に基づいて説明し、事業所で出来ることを伝えて確認している。訪問看護師には職員が相談したり、医師に繋いでもらう。利用者の状態について、家族との話し合いにも相談に乗ってもらっている。また、夜間時も連絡がとれる24時間体制で対応しておりチームでの支援に取り組んでいる。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の様子観察し、異常時に対応できるように努めている。マニュアルの見直し、情報共有を行った。	一昨年利用者の圧迫骨折があり、基幹病院に入院された事例があり、マニュアルの改正のための話し合いが行われ改正された。また、AEDの設置もあり、コロナで出来なかった消防署員立会のAEDの訓練が今年12月には予定されている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2ヶ月1回の自主消防訓練を実施し消防署へ届け出ている。	災害対策としての備蓄品リストがあり、消費期日も記載されている。また、事業所では通信訓練を定期的に行っている。今後もいつ災害が起こるかわからないと自主消防訓練を行っている。	火災や災害はいつ起こるかわからないので、常に考えられる事を用意する必要がある。今後は火災時の訓練だけではなく、様々な災害を想定した訓練が望まれる。また、職員が災害時身に着ける非常持ち出し(名簿等)が用意されていない状況が窺える。定められた場所に置き、いつでも誰でも実施できるよう実践的な研修や訓練が行われることを期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	周囲への配慮や本人の気持ちを大切にしながら対応を心がけている。職員の声や言葉に気を付けている。	プライバシー保護に関するマニュアルが整備され、その内容は、職員の定例会議にて行われた。プライバシー保護に関することは、就業規則の中にも明記されており、配慮しながら対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その方の力に応じた言葉かけにより、自己決定や意見が言えるような働きかけを行い、対応している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大体の一日の流れはあるが、柔軟に参加してもらっている。自分のペースで過ごせる人もあれば、そうでない人もいるので、様子をみながら誘いかけや希望を聞いてみたりしてやりたいことに取り組めるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	離床時には髪型を整えるよう気を付けている。散髪時には好みの髪型を伝えたりしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者に味付けや調理法を聞いたりしながら職員が調理している。おしぼりたたみをお願いしている。食事のセッティングは職員、下膳はできる方にはお願いしている。	朝食は2年前より業者による配食を利用し、昼食は台所と食事専門の職員が配置されている。職員と利用者は地域や季節の料理や味付けなどを話し合っている。利用者は食後に食器を片づけたりテーブル拭きなど職員と一緒に見守りの下、出来ることを楽しみながら行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	申し送りなどでその日の体調など情報共有して、次の食事につなげている。水分摂取には特に気をつけOSIを作り、不調時に飲んでもらっている。水分不足の方にはこまめに、あるいは本人の飲めるものを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	職員は、言葉かけや見守り、またはできない方への手伝いなど、把握し、支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その人に合わせたパットの種類や誘導の仕方に配慮している。失敗してもさり気なく、済ませられるように対応している。排泄時の一連の行動にできる部分を職員で情報共有している。	トイレは清潔に清掃されており、車いすでも使用できる広さである。利用者一人一人の排泄リズムを把握し、誘導や声掛けなどの支援もさりげなく行われている。また、布パンツの方もおり、利用者への声かけも職員の心使いが感じられた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼るだけでなく、果物・乳製品・水分補給・オリーブオイルなど摂取してもらうようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴剤を使用したり、菖蒲湯やゆず湯など季節の湯でも楽しんでもらっている。本人の希望に沿って入浴方法や安心して入浴が出来るような対応をしている。	週3回の入浴を基本にして対応している。時間は午後入浴の希望の方が現在多いとのことである。季節の菖蒲湯やゆず湯などの他に入浴剤を使用して気分転換や楽しみに繋げられるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のペースや習慣で安心して休息・午睡してもらえるようにしている。午睡時の明るさや室温に配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々のケース内に服薬に関する説明書をファイルし、職員がいつでも確認できるようにしている。服薬支援は、飲み込みまで確認するようにしているが溶けにくいものや拒薬する方には情報共有し主治医や薬剤師に相談したりしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	手先の作業や、たたみ物など、その人の力が発揮されるような仕事をお願いしている。職員も参加し、会話したりしている。ねぎらいの言葉がけを忘れないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染予防対策にて外出支援などがあまりできなかった。車でのドライブが数少ないができた。	コロナ禍で中々外出が難しいときもあったが、季節季節のドライブは続けており好評である。数人ずつ分かれて出かけ、受診の時の帰り道にミニドライブを何度か試みて好評だった。近所にある保育園の散歩や登下校する学童の様子を見ることが好きな利用者もおり、事業所では、敷地の中にベンチを置いてゆっくりできることや、感染症対策の中でも、お互いが手を振りあう仲の近所付き合いが出来るよう支援に努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	感染予防にて、買い物代行をさせてもらっている。自分のお金として持っている方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	贈り物が届いたり、お礼の電話をかけたり、親戚からの電話でのやり取りを楽しみにしたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	感染防止の観点からも職員それぞれが換気、温度、湿度には配慮し、こまめに確認し気を付けている。	地域の特産品である季節の花の「百合の花」が飾られ、優しい匂いに包まれている。畑も田んぼもあるが、住宅地の中に事業所はある。窓からの光が注ぎ、明るく清潔に清掃されており、生活される利用者の気持ちを明るくさせているようだ。利用者はパッチワークづくりや、パーティーションの仕切りの布作りなど、縫物やお茶をしながら楽しく過ごしている。職員は出来ることの継続を無理なく支援し見守っていたのが印象的である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その方の思いを職員が汲み取れるよう配慮している。入居者それぞれ落ち着く場所のある方もいるため確保できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自分のお部屋という安心感を持って頂き、家族や親せきの方々の写真や自分好みの動物や花などの絵や写真などを飾っている。	ベットとタンスは事業所の物だが、利用者はこれまでの生活の中で、大切にされてきたものや写真などを飾って楽しんでいる。自室のゴミを自身で出す人や毎朝、自室のモップ掛けを行う方も居られる。ほとんどの方は職員と共に、または意向を確認しながら支援を行うなど居心地よく生活できるよう支援に努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人のわかる力と、できる力を把握し、家族に相談したりして都度整えたり必要な物をそろえたりしている。混乱が生じた時には、丁寧に繰り返し説明したり、何が原因なのかを探り、相談し、手立てを考えたりして少しでも安心できるようにしている。		